

東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第11回

◎支えている人／話し手：櫛田啓子さん

さくらさくらんぼの保育を埼玉県深谷市にて斎藤公子先生から学び、福島県いわき市にあるいわきさくらんぼ保育園に勤める。2018年春に退職後、自宅で家庭的保育事業を始める。無認可で1年、認可を取ってから現在4年目（2023年時点）。



震災当時のこと

あの時、こどもたちはお昼寝からちょうど起き始めた時だったんです。私は会議中でした。2011年3月11日、PM2時46分、突然の大きな揺れです。起きている子、まだ寝ている子は職員が抱き、園庭に避難しました。避難訓練はしていましたが、いざそういう現実におつつかるとみんな慌てましたね。こどもたちには担任がついて、私は全体を見なくてはいけなかったのですが、地面が揺れているところで大の字になって、こどもたちと自分はこのままどうなるんだろう？でも、もうなるようになるしかないと思いました。園の隣の家の瓦が落ちてきたり、園舎の木製のガラス戸は割れて柱が歪み、2階の本棚、事務室も散乱した状態でした。年長さんはお昼寝がなく、絵具で絵を描いていたんです。子どもたちはテーブルの下に避難したのですが、そのテーブルの上に蛍光灯が落下、ガラスが四方八方で割れ、小さい子たちはびっくりしてみんな泣きわめき、職員は「大丈夫、大丈夫」と子どもたちを抱き守るのに必死でした。幸いにもひとりもケガする子はいなく避難できました。園庭の真ん中の太いナンキンハゼの木を第一避難場所と訓練していたので、まずはそこにみんなで集まり、第二避難で多目的部屋があるかもめ棟という一軒家に避難しました。そこでこどもたち全員の再確認ができて、ほっとした時、おやつ時間過ぎてることに気づいて、おやつを食べ、子どもたちも少し落ち着いた様子でした。その時、みぞれが降ってきたんですよ。なんだろう、こんな時期に、と不思議でしたね。その後、親さんもやっぱり心配で早めにお迎えに来て下さいました。16時か16時半くらいから、何人かの方が迎えに来始め、最終的に全員帰ったのは21時くらいでした。

震災直後

当時、園には136人のこどもたちが通っていました。そのうち95%のこどもたちは避難し

て、残ったのは私と主任、自宅に被害のあった職員5人くらいかな。私の家族も避難して、私も避難するようになって息子に言われましたけど、リュックは持ったものの、どこに行けばいいのかわからないです。1回出たけど戻ってきて、待機していました。行けなかったです。なんだろう…行ったからってまた、どうしようもないんです。私はやっぱり、いわきにいるべきだろうと思ったんです。仕事や園に対する自分の責任というか、そういうことだと思います。帰ってくる子がいたらだれが迎えるんだ、と。いわきにいるしかないとか、それしかできなかったですね。休園するようにと指導されていたので休園はしていましたが、ほぼ毎日園に行き片付けなどいろいろしていました。1か月程経ち、除染のために園庭の土を削らなくてはと思い、とにかく、一日も早くという思いがあったからかなと思います。その間、担任は避難しながら、子どもたち、家族が元気かどうか保護者と連絡を取り合い、安否の確認をしました。子どもたちがいない日がずっと続いて、3月末には退職した職員もいました。それはやはりショックでしたが、それぞれの考えがあるので、止めることはできません。5月の連休明けから60人くらい、半分くらいですね、子どもたちが戻ってきて、でも最終的にはやっぱりちょっと減っちゃったんです。110人くらいになっちゃったかな。3月に卒園式はできず、とにかく子どもたちが帰ってきてからと思い、卒園式は子どもたちが全員そろってから行いました。

震災2か月後

保育を再開して、子どもたちの散歩コースにたくさんの春が待っているのに、花をつむこともできなかったんです。天気の良い日には園庭で食事することもあったのですが、桜の木の下で食事もできない。震災前までは裸足であそんでいたから、園庭に草は生えなかったんですけど、踏む子どもたちがいないから草が生えてきました。恒例の田んぼでの手植え、稲刈りをして、お米を作ることもできなくなりました。私たちの大切な教材は、太陽と水と砂なのですが、もうこの保育はできないのではないかと不安がありました。やはりむなしさというか、そういうことを感じていましたね。それでも、帰ってきた子どもたちから通常通りに過ごしていました。私たちの年長さんの最初の課題は、自分で雑巾がけする雑巾を自分で縫うということで、通常通り取り組みました。園庭で体を使ってあそんでいたことが保障できない分、それは保障しないといけないことでした。身体的なところで発達を保障していくかというところでは、室内にターザンやブランコ、登り棒のようなものを作って、どれだけ体を動かしてあそべるか、他にも、雑巾がけを今までの倍やるとか、どうやったら体力を使うか職員みんなで考えて工夫していました。それから、私たちにはリズムあそびがあります。毎日取り組んでいたリズムあそびができることはありがたいことと実感しました。そんな中、園庭では土壌を10~15センチ削って、土を入れ替えることを2回行い、7月の下旬くらいには外でプールに入れるようになりました。15~20分くらいで時間を制限せざるを得ませんでした。時間を測ってやることは、もどかしい気持ちもありました。でも、そういう制限があったからこそ、少しでも子どもたちのために出来ることは何か、という気持ちが高

まってきたのかな、今振り返るとそんな気がします。しかし、この保育を続けていくことは不可能なんだろうかという不安は、その後、8月頃が一番大きかったです。机に座らせて何かをやらせるっていう保育ではないので、考えさせられ、課題が多かったですね。だからこそ葛藤みたいなものはすごく強かったと思う。室内での保育だったら、こんなこともあまり考えなかったのかなと思いました。本当に、この時はもう戻れないと思いましたけど、今こうして保育ができていることはありがたいことだなと思います。

線量への対策

震災前は、摘んだよもぎでよもぎだんご作って、給食ではつくしのごはんを食べていましたが、たんぽぽもつくしんぼも採ってはいけない、触ってはいけない状況になりました。特につくしははかまに入りこんでしまうので線量が高かったんです。園庭には滑り台やアスレチックがありますけど、木製なので放射能が染み込むので触ってはいけない、登ってはいけなかったんです。年長さん、年中さんくらいの年齢だと、毒がついているからって言うのわかりますけどね。1、2歳はわかんないですもんね、目に見えないんですから。今までした事がない鍵を閉めるという保育をせざるを得ませんでした。制限することは、特に乳児のこどもたちがかわいそうでした。そんな中で、親さんの中にもいろんな意見がありましたね。これくらい下がったからそんなに気にしないで通常の保育に戻してほしいという方と、まだ心配だっていう方と。園便りには、園内の線量を測って、この場所は線量がいくつになっているか図解して載せていたんです。線量がだいぶ下がってきたことを書いて、少しずつ安心してもらえるようにしました。線量を測ってくださる研究者の先生たちも心配して来てくれて、保護者向けに講演をしてもらったりして、少しずつ親の理解を得て、通常保育をできるようになったのは1年後くらいでしたね。散歩で行く山も研究者の先生たちと全部測りました。こどもたちが足を運ぶ場所を全部です。給食は、いわきのものは使えませんでした。しかし、ありがたいことに姉妹園の仲間たちが野菜やお米を送って下さいました。今は通常に戻っていますが、4、5年間は遠方から買ったり送ってもらったりしながら提供していました。いわきのものでも大丈夫だと公表されてからも、全部測って、大丈夫だというものを使うようにしてきたんです、少しずつね。

園庭では、土壌の入れ替えだけでなく木の枝を切りました。桜があつて、緑がたくさんある園庭なんです。あの時、園は30年くらいの歴史があつたので木が生い茂っていたんですけど、ほとんど切りました。葉っぱがあつてはいけないからです。0歳の赤ちゃんは今までその木陰の中、芝生の上でプールをしていましたが、芝生も全部張り替えました。木を切ることに関しては、岡山から樹木医の方が支援に来て下さり、今後の木の成長に影響がないように手入れをして頂きました。震災から7年後くらいまで年に一回は、切断された木の成長を確認に来ていた頂いたり、姉妹園の方をはじめ、本当にたくさんの方が支援に来て下さいました。ありがたく思いました。

こどもたちを守るために

マスクをする、食材を検査する、線量を測るなど、とにかく安全な空間、安全な環境を作るにはどうしたらいいかを考えていました。私たちの保育、今できること、こどもを守るためにどういう環境を取り戻すのか、そのためにやっていかなきゃいけないことはどういうことなのか、早め早めに懇談会、父母会を開いて説明しながら、こどもたちのために親と、私たち職員、園が一体になり、ともに話し合いながら取り組みました。保護者たちはやっぱりこの保育が好きなんですよね。この保育を続けてほしいし、我が子にこの保育を、環境を与えたいと思って選んできた人たちなので、親さんの協力や気持ちは本当にありがたいなと思いました。そうして、運動会や卒園式でこどもたちみんなが集まった時には、ああよかったな、みんな戻ってきたんだなと実感しました。運動会はしばらく外でできなかったの、小学校の体育館を借りたりして室内で行いました。通常通りさくらんぼの園庭で運動会ができた時も安心しましたし、当時はこどもたちもマスクしていたけど、マスクを外して、こどもたちの表情、笑顔が見れるようになった時、また安心しました。ひとつひとつクリアして、次は、なんだ？この次の課題は？何をしなきゃいけない？と考えさせられました。

全国の仲間たちのこと

私たちのさくらさくらんぼ保育には、全国の仲間たちが北海道から沖縄まで 130 か所くらいあって、その仲間たちも心配してくれました。春と秋に全国の仲間たち 600~700 人くらいが集まる研修があるのですが、そこで震災のこと、特に相双地区の現状をみんなに伝えてほしいということで、第一原発から第二原発まで足を運んでみました。自分の目で見なくては、みなさんに伝えられないじゃないですか。櫛葉だったかなと思うんですけど、街をちょっと走って見たんです。そうしたら、時計が 2 時 46 分で止まっていました。イノシシが横断したり、とにかく人が歩いていないところをゆっくりゆっくり車で、30 キロくらいで走る。カーテンが風に揺られているだけ、ガラスが割れて、車も家の中に突っ込んでいました。車で走っていても、すれ違うのは警察の方たちばかりでした。そんな状況を全国のみなさんに伝えたのが 3 年くらい続きました。私たち、いわきさくらんぼは内陸寄りですから、海岸沿いで園ごと大変な思いした方たちがたくさんいましたからね。私たちはまだ住む家がある、こうして生きている、命がある、ということはどんなにありがたいことか。全てをなくした方たちが本当にね、たくさんの方たちに本当に申し訳ないなと思いながらいたので。だからこうやってお話って言われた時も、私なんかよりもっと大変な人達の話聞いたほうがいいんじゃないかなと私は思ったんですけどね。それから、全国の仲間が福島に研修に来たこともありましたし、園児がいわきからどこかへ移住したいという時は仲間たちの園に転園することもありました。いわきを離れても、姉妹園との、仲間との連絡で、元気にしてるよとか、ここでこうやって生活しているよとか連絡もったりしていたので、安堵の思いでした。また、年長さんは年に 6 回、2 泊 3 日で合宿をやるんですが、それもできなくなってしまって。そうすると、全国の仲間から、こっちは大丈夫だからおいで、こっちで合宿

させたら、という話もあって。いろんな声をかけていただきました。全国の組織の中で仲間がたくさんいるっていうところでは、本当に心強いというか、ありがたいことです。

つづく、こどもたちとの交流

本当にありがたいことに、卒園したこどもたちや親が芽ぶきの原の園に手伝いに来てくれています。卒園したこどもたちの中には、和太鼓をプロとしている子やゴスペルを唄っている子がいるので、ここに来て披露してもらいました。他にも催し物をやる時に親さんたちに声かけると、100人くらい集まってくれました。震災の時に生まれたこどもたちが卒園するというような節目の時には、あの時にみんなお腹にいて、そのこどもたちが卒園していくんだね、と、そんな話をすると思い出して涙流すお母さんたちもいました。あの時はやっぱり、大変だった。妊婦さんや生まれたばかりのあかちゃんを抱えた親さんは、本当に心配だったと思いますからね。まあそんなこともありますけど、もう、みんな前向きに生きています。でも12年経っても、3.11は忘れられないですよ。

そして、これから

私がさくらんぼの斎藤先生から学んできた保育を退職後もここで実践しているのは、発信していかないといけないという気持ちからです。だれに指名されたわけでもない、自分が勝手に思っているだけで、ひとりでも多くの方にさくらんぼの保育を知ってほしい。いわきは、例えばうちは英語やっていますとか、体育教室やっていますとか、保育を営業的に宣伝して園児を集めることが多いですけど、それでこどもが本当に幸せかというところじゃないと私は思っています。さくらさくらんぼの保育をみんなが受けられたら、こどもたちはどんなに幸せだろうと思っています。だから私はこの芽吹きで、少人数だけれども家庭的保育事業として活動し、サークルのお母さんたちと毎週金曜日に公民館を借りて、リズムあそびを通して生活しています。今まで私は働いている親たちのために保育園の仕事をしていたんですけども、今は専業主婦で、家庭でこどもを育てている親さんたちの悩みに少しでも役に立てばと思って話を聞いています。私が今まで関わっていた親さんたちとは違う悩みを抱えている方たちもいるので、そういう方たちの力になればいいなと思います。話は変わりますが、私、いま、本当に夢見ています。夢見る小学校という映画をここで企画して上映会を開催したんです。実行委員会を作って、当日は100人くらい集まりました。この映画を観た時に、さくらさくらんぼ保育の延長のように感じたんですよ。ひとりひとりがもっと大事にされるような、競争社会じゃない、不登校の子をつくらない教育です。いわきは一番になれるというのが当たり前の地域なので、逆に大変かなと思うんですけども、この保育を発信しながらも、前進しようかなとか思っています。遠方にわざわざ行かせることもない、いわきにそういう学校があればいいわけですよ。それが私のこれからの目標で、やらなきゃいけない、どこまでやれるかわからないですけども、夢見ているところです。こどもたちの幸せのために考えています。

◎福島県の櫛田啓子さんにお話を伺って

酒井真由子

丁寧に手入れをされていることが伝わる古民家の一室で、櫛田さんは初めに現在の園の概要をお話してくださいました。「素敵なお部屋だな」と思いながら櫛田さんの話に耳を傾けていたのですが、櫛田さんが2011年3月11日のことを語り始めたところで、室内の雰囲気が一気に変わりました。櫛田さんのお話のおかげで、まるで2011年にタイムスリップしたかのようで、私は櫛田さんの話に聴き入りながら、疑似的ではありますが、2011年3月11日とその後を日々を、櫛田さんと共に歩ませていただいているような感覚になりました。

櫛田さんが園長をされていた「いわき・さくらんぼ保育園」では「太陽と水と砂」の保育を大切に、桜の木の下で食事をしたり、はだしで遊んだり、木陰や芝生のもとで水遊びをしたり、つくしを摘んでつくしご飯にしたりと、なんとも素敵な保育を行っておられました。だからこそ葛藤を、櫛田さんは経験されていました。子どもの安全を守ることはもちろん大事ですが、子どもが子ども時代に経験すべきことを大人が保証することも大事。けれど、それができないことからくる虚しさや苦しさを、櫛田さんの話から強く感じました。櫛田さんは、屋外での保育ができないなかで、室内での保育を工夫していくのですが、これまで大切にしてきた「太陽と水と砂」の保育ができないことで、櫛田さんはどんな思いだったのだろうかと、とても苦しくなりました。櫛田さんご自身も「本当に、この時はもう戻れないと思った」とおっしゃっておられました。それでも、櫛田さんは、目の前の子どもと保護者を大切に、全国の保育仲間とつながり、保育を続けていったのです。

気がつくと、私たちが居る部屋は2023年8月に戻っていて、和やかな雰囲気が漂っていました。そして、櫛田さんは、思い描いておられる構想、未来につながる話をしてくださいました。退職後も「太陽と水と砂」の保育に基づきながら新たな取り組みをされておられる櫛田さんのお話はとても魅力的でした。

お話が一段落してから、櫛田さんが私たちのために用意していた手書きのお便りを見せてくださいました。当時、櫛田さんが保護者に出していたお便りです。2011年5月2日発行のお便り『みんなで作る手作りの保育 子育てに科学とロマンを』（第205号）には、「さくらんぼには いつ 春が来るの?」というタイトルで次のように書かれています。

震災から50日経ちます。

今、さくらんぼの園庭は、元気に遊ぶ子供たちの声も姿もありません。

子供たちの散歩コースには、たくさんの春が待っているのに 花をつむ子もいません。

桜の木の下で食事もできません。寂しく虚しさを感じています。

(略)

原発、放射能の問題で、室内での生活を余儀無くされ、子供たちは元気にリズムをしたり、運動会ごっこをしたり、お絵かきをしたりしながら 限られた空間の中で過ごしています。年長さんは、仲間全員揃っていませんが、はじめての課題、雑巾縫いに入りました。針の穴に糸を通す、縫い目を細かく縫っていく、子供たちの目付きは年長さんらしさを感じさせてくれます。

(略)

櫛田さんの手書きのお便りは、子どもにとって必要な経験を保証しなければならない園長としての、保育者としての、そして一人の人間としての思いや虚しさ、けれどそのような状況から見出した一筋の光・未来が記されている、とても貴重なお便りです。櫛田さんから紡がれた言葉を受け取り大切にしながら、子どもの幸せをについて考え続けていきたいと思いました。

聞き手 小林成親、京井麻由

まとめ 酒井真由子

編集 清水冬音